



貰つた妹

美知代

壽子さんは一人っ子です。姉さんありません、妹もありません。ですからそのお友達、姉さんと妹とお揃ひの着物を着て居たり、可愛らしいお人形さんのやうな赤ん坊を抱いたり負ぶつたりして居るのを見ると、もう／＼羨ましくつて羨ましくつて、お宛後には何故こんなに自分ばかり一人ぼつちで淋しいのかと、泣き出したくなつて、どんな面白い遊びをしてゐても、直ぐお家へ飛んで歸つて、男でも女でもそれはどちらでも好いから、可愛らしい赤ん坊を一人産んで下さいと母さんをせびるのでした。母さんは困つてしまつて、赤ん坊はそんなに産みたいと思つたつて、勝手に産めるものぢやありませんと仰つても、壽子さんはどうしても赤

ん坊が欲しくつてたまりません。
「よう母さん、そんなら赤ん坊貰つて頂戴。」
「まあ壽子さんは何を云ふの、赤ん坊はお人形ぢやないから、何處にも賣つてやしませんよ、そんな無理を云ふもんぢやありません。」
「嫌よ、嫌よ、そいぢや貰つて頂戴。」
「さうね。」
母さんは貰ひつゝのことにお氣がつきませんでしたが、壽子さんに貰つて頂戴と云はれて、其氣にお成りなさいました。そこで、父様に御相談なさいますと、
「左様だ、壽子は好い事に氣がついた、一人っ子と云ふものは兎角甘やかして育て、我儘になり勝ちでいけないもんだ、それに壽子も一人ぼつちでは淋しいだらう、何處か善い人の兒を一人貰ふことにしよう。」
父様も直ぐ御賛成なさいまして、急に方々の人に頼んで、好い貰ひつゝ兒を探しました。すると間もなく父様のお友達の親類で女の兒を一人貰つて欲しいと云つて参りました。早速父様が其家へ赤ん坊を見

にいらつしやいますと、その兒と云ふのは、よく肥つて、色の白い、伶俐な兒なものですから、直ぐ貰ふことに約束しておしまひなさいました。
「どんな兒？」
「壽子さんが歸つていらつした父様のお膝に抱かれて訊きますと、父様はにつこり笑つて、
「好い兒だ、壽子によく似て居るよ。」
「さう、そいぢや本當の妹になつちまふわねえ。」
「あゝさうとも、大丈夫本當の妹になるよ。」
「何故一緒に貰つて來なかつたの、早く見たいわ。」
「今に連れて來るつて、大抵明日の朝位つれて來るんだらう。」



壽子さんは早く明日になれば好いと思つて、待ち遠しくつて、

「あゝ、早く明日になれば好い、さうでない」と私
本當につまらないわ。」と終日こぼしてばかり居りま
した。
愈々明日になりますと、お晝前頃にお人形さんの
やうに可愛らしい赤ん坊を抱いた小母さんがお越し
になりました。
「妹かしら？」
待ち遠しくつて、門まで出迎へて居た壽子さんは
軀をドキ／＼させながら、じつと見て居りますと、
「まあ可愛らしいお嬢さんね、あなたは此處の家の
御兒様でいらつしやいますの。」と、その小母さんが
傍へ寄つてお訊きになりました。
「えゝさうよ、小母さんは赤さんをつれて来て下す
つたの、違つて？」
「ほゝ、待つて、下すつたのね、有り難うよ、どう
ぞね、可愛がつてやつて頂戴ね。」
「えゝ、え私本當に可愛がつてよ。どんな赤ちゃん。
壽子さんのぞいて見ますと、緋ちりめんの袖口
から、眞白な丸いお手々を出して、赤ん坊は壽子さ
んのおさげのリボンを取りにかゝるのでした。」

「アラ小母さん、リボンが欲しいんだつて、ハイよ
今あげてよ。」
急いでスリと髪から外し、巾廣の美しいのを赤
ん坊の手に持たせました。
「アレまあ勿體ない、汚すといけませんから、御返
しませうねえ。」
小母さんが氣の毒がつて赤ん坊から取返へさうと
すると、赤ん坊はしつかり握つて、
「あつぽ、あつぽ。」としきりに喜んで居ます。
「赤いの好きなねえ、アラ小母さん取返さないで
好いんですよ、ねえ赤ちゃん、あつぽ、あつぽ。」
赤ん坊は直ぐ壽子さんに馴染んでしまつて、小母
さんが壽子さんの案内で家へ行つて、父様や母様
に御挨拶をなさる間も、黙つて壽子さんに抱かれて
音無しに遊んで居ますし、壽子さんが「おんぶ」と
脊中を向けると譯なく負ぶさるし、壽子さんの嬉し
さといつたらありません。
「どうだ嬉しいか、お人形さんよりは重いだらう。」
「それによく肥つてますから、壽子さん、あなたお
肩が痛いでせう。」

「いゝえ、さうでもないことよ、ねえ赤ちゃん、
姉さんに負ぶだわねえ、裏のお庭へ行きますか、
ハイつて仰有い、ハイつて、おゝ、好い兒だゝ、
姉ちゃんの可愛い兒だわねえ、えゝて仰有い。」
「ほゝ、まあ何て御しやべりでせう。」
「だつてお守りだものねえ。」
父様と母様から冷かされて、壽子さんが赤くなり
ますと、
「それでもあゝして可愛がつて頂いて、あの兒は幸
福ですわ。」と小母さんは仰有います。
「ねえ小母さん、赤さんの名前は何て云ふの。」
「ハ、ハ、知らなかつたのか呑氣だな、そのちゃん
さ、好い名だらう。」
「だつて誰からも教はらなかつたんだもの、ねえそ
のちゃん。いやな父様だつて、さう云つておあげな
さい。」
「こらゝそんな事教へるんぢやないよ。」
「知らないつてねえそのちゃん！」
壽子さんはうれしさに赤ん坊を抱いてお庭へ出
て行きました。